

Title	18世紀の文学辞典より見た中世, ルネサンス, 近世 フィレンツェの知的生産性と「家」
Author(s)	米山, 喜晟
Citation	大阪外国語大学学報. 70(3) p. 53-p. 70
Issue Date	1985-11-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81081
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

18世紀の文学辞典より見た中世，ルネサンス，

近世フィレンツェの知的生産性と「家」

イタリア語科 米 山 喜 晟

La famiglia e la produttività intellettuale di Firenze medievale, rinascimentale e dopo-rinascimentale sui dati statistici di un dizionario del secolo XVIII

Yoshiaki YONEYAMA

Cap. I L'atmosfera, nata sotto l'effetto delle mura di una città, caratterizza irragionevolmente la personalità e la maniera di vivere degli abitanti. Dopo la sconfitta di Montaperti accadde un cambiamento radicale nelle mura di Firenze. Per spiegare bene la produttività intellettuale prodigiosa di Firenze medievale e rinascimentale, bisogna anzitutto chiarire il corso del cambiamento numerico degli scrittori fiorentini. Ma per il nostro scopo, non basta conoscere il numero degli scrittori famosi, ma bisogna conoscere anche il numero degli scrittori non tanto importanti, anche quasi anonimi. Perciò mi pare alquanto utile esaminare un dizionario letterario del secolo XVIII, cioè la 'Storia degli scrittori fiorentini' di G. Negri, nonostante alcuni errori compresi.

Cap. II Attraverso il calcolo si è trovato che i numeri degli scrittori sono vicino a 40, 80, 160, 320, cioè 40×2^n . Da questi numeri si può presumere che il numero sommato di ogni periodo fu raddoppiato per tre volte, ma il ritmo era quasi uguale e continuo e senza interruzione. Perciò dobbiamo pensare che il corso dello sviluppo sia continuo e successivo e che il principio di tutto il corso fu il tempo della sconfitta di Montaperti. Il cambiamento radicale accadde appunto a questo punto. Poi tutte le famiglie sono divise in tre gruppi, cioè gruppo A (delle famiglie che producono soltanto uno scrittore), gruppo B (2-4 scrittori), e gruppo C (più di 5 scrittori). Nell'età rinascimentale, l'ordine della maggioranza della proporzione si diventa completamente contrario a quello dell'età medievale, cioè dall'ordine A-B-C all'ordine C-B-A. Così, si può conoscere come si intensificò l'attività intellettuale in questa età nella classe dirigente di Firenze.

Cap. III Analisi delle 54 famiglie principali produttrici intellettuali fiorentini. L'importanza della potenza intellettuale fra la classe dirigente di Firenze.

Cap. IV Si può conoscere il numero dei preti compresi nei dati, perché anche l'autore del dizionario era un religioso, cioè un gesuita. La proporzione dei religiosi fra i numeri sommati di ogni età si crescono attraverso le tre età continuamente. Anche questo fatto significa che ci accadde un cambiamento radicale all'inizio di tutto il corso e ci conferma la continuità

dello sviluppo. È notevole il numero incredibilmente piccolo della percentuale dei preti nel gruppo B (12.5%) dell'età medievale. Questo prova l'entusiasmo intellettuale fra le famiglie relativamente minori di questa città, che sarebbe diventato il motore dello sviluppo dell'attività intellettuale di tutta la città.

第一章 本論の問題および資料

中世およびルネサンス期を通じて、フィレンツェはその人口に比して異例の知的生産性を発揮し続けた。その最初の飛躍の時期にモンタペルティおよびベネヴェントの戦いが行われ、それが決して偶然の一致ではなかったことを私はすでに論じておいたが¹⁾、ポポロの *rabbia* (征服への狂熱) がこの戦いで一気に鎮静し、雰囲気が一変したことを最大の理由として指摘した。勿論この変化を別の見地から促えることも可能で、たとえば Jones 流の社会経済史的立場に立つならば、ポポロの異常なまでの好戦性は、私が強調した略奪への情熱よりも、彼らが隣接した領土を支配権に収めて、自らの商業圏に繰り入れようと望んだこと²⁾、さらに直接地続きの商業圏の拡大が、国際的交易を志向する大商人達よりも、日常品を扱う中小商人達をより強く誘惑したことによって説明されうるかも知れない。すなわちモンタペルティの敗戦は、こうした地元商業圏の拡大の夢を暫時打破り、その結果専らアルプスのかなたとの交易に情熱を傾けさせることとなった、というわけである。こうした解釈は、決して私の主張とは対立するものではなく、むしろそれを補強してくれるもののように思われるが、ただ当時の人間の行動を余りにも理性的に、計算づくで促えすぎているきらいがないでもない。やはり私は、ポポロの好戦的な狂熱の底に潜む征服欲を重視したいと思うし、さらにそれだけでも説明しきれない非合理的な側面をも底深く把握していく努力が必要であることを主張しておきたい。具体的には中世イタリアの略奪史こそまず当面書かれるべき主題ではないだろうか。

非合理的行動といえば、モンタペルティの敗戦以後のフィレンツェ市民の反応もその一例であるといえるだろう。G. Villani も、次の一文でそのことをはっきりと指摘している。

「彼らの亡命に関しては、ゲルフィ党は大いに非難されるべきである。というのは、フィレンツェの都市はその城壁がきわめて強固であり、堀には水を満々と湛えていたからで、十分それを守り、保つことができるはずだったが、神の裁きはその罪を罰するために、防御もせずに逃走を余儀なくせしめ給い、また彼らを嫌い給うた神は、その正気と分別とを奪われたのだ。」³⁾

Villani は、ゲルフィ党指導者の狼狽ぶりを理性では説明しえなくて、神の裁きだと見なしているが、実は強固な城壁で囲まれたコンパクトな都市であったが故に生じた現象と考えればならなくもない。ちょうど四界が海で囲まれたわが国が、敗戦と共に津々浦々まで戦意を喪失したように、堅固な城壁の中で、たとえ内部では相争いつつも常に一体感を有していた都市では、雰囲気の変化が驚くべき早さで伝播し、頑丈な家々の壁の内部に侵透したとしても必ずしも意外ではない。このように城壁に囲まれた中世都市の内部には、城壁効果とでも呼ぶべき、統一化し、均質化する作用が常時働いたことを忘れてはなるまい。こうした均質化作用の影響で、各都市

は独自の雰囲気を持続した。すぐれた才能を次々と開花させることになるフィレンツェには、そうした個性の発展を可能にする雰囲気があったと見るべきで、単に富を集積した結果だとのみ考えることはできない。文化的創造の基盤となるフィレンツェの教育熱にしても、実用的な必要から説明される場合が多いが、そのような説明ではカバーしきれない部分が余りにも大きいのではないだろうか。むしろ教育効果に対する期待が先行し、私塾通いが大流行したことの方が直接の原因で、その成果が実用面に反映してフィレンツェの商業の質を高めたとも考えられるのだ。

さて本題に戻り、フィレンツェが当時のイタリアの1パーセント前後の人口で、1260年代以降拔群の知的生産性を発揮したという現象の解明に取り組む時、どうしても無視しえない問題は、当時の都市社会の基本単位であった「家」の影響である。フィレンツェの「家」制度がその高い知的生産性の一つの基盤として役立ったと推測させる根拠は、無数に存在しているといっても過言ではあるまい。その端的な例として、L. B. Alberti の『家族論』中にみとめられる次のような一文がある。

「わが Alberti 家の人々は、ほとんど全員が大変な学者でした。Messer Benedetto は自然学や数学において、とても博学だという評価を得ていましたが、実際その通りでした。Messer Niccolao は、神学の研究に幾多の労苦を捧げ、その息子たちも、父親に似ぬ者は一人としていませんでした。つまり彼らは、その習慣においてこの上なく洗練され情愛豊かであったように、文筆や学問の方面でも、様々な分野にこの上なく精通していたというわけです。Messer Antonio は、最高の著者なら誰であれその才能と技能とを味わおうと望み、きわめて優雅にすごされた余暇の間には、常に立派な学問に没頭して、あの恋愛対話詩の他に、『著名人物語』を著わしています。またあなた方もご承知の通り、Ricciardo は占星術でもとても知られていますが、人間学 (umanità) と詩人たちの研究をいつも楽しんでいます。Lorenzo はといえば、数学と音楽とに関して誰にもひけを取りません。そして Advardo よ、あなたはあらゆる事柄に関して、法や道理が何を要求しているかを知るために、市民法を長年研究しておられる。わが一族の名声の基となった、学識豊かなそれ以外の先祖たちのことは触れないでおきましょう。わが Alberti 一族の学問と名声の光源となった、Messer Alberto を延々と讃えることもやめておきましょう。」⁴⁾

Leon Battista Alberti は、ここで若き Lionardo の口から、Alberti 家に脈々と流れ続けているすぐれた学問の伝統を語らせているのであるが、これが語られた時点とされているのが1421年5月であることから考えて、すでにその前世紀、まだいわゆるルネサンス期が開始する以前からそうした伝統が一応形成されていたことや、それも単に彼らが一般教養的な読書人だったというだけではなく、それぞれ独自の専門領域を有していたこと、さらにその分野を学んでいるだけではなくてその知識を駆使し、著述する人々がいたことを語っている点が極めて興味深い。

ただし Alberti 家が、学問のためには私財を惜しまぬという形で支援したとは決して書かれていないようである。たとえば対話者の一人 Giannozzo は、若いころ学業が嫌いではなかったのに、親たちの指示で実業に加わらねばならなかったと述べている⁵⁾。作者自身も学者になる前に似た

ような体験を味わっている⁹⁾。だから「家」の富が必ずしもその成員の知的活動を直ちに豊かにしたとはいえないようである。とはいっても、やはりある程度富める「家」の子供でなければ、学業などはかなり困難だった。つまり資産は一応知的活動の必要条件ではあっても十分条件ではなかったのである。それではその十分条件とは何か。たとえそれが何であるにせよ、そうした条件がこの Alberti 家にかなり豊かに存在していたことは、Lionardo の証言や、Leon Battista の存在自体から想像しうるのである。

だがそうした考察の以前に、フィレンツェの知的生産活動がどの程度「家」と関わっているか、その実態を把握する必要があるだろう。たとえばフィレンツェで特に知的生産活動が顕著だったのはどの「家」か。またいかなる性格の「家」がそうした活動に参加したのか。当時最も代表的な知的職業だった聖職者の比率はどうか等々……。こうした疑問に答えるためには、現代通用している文学辞典や百科辞典は、いずれもきめが粗すぎるようである。ところが18世紀初頭に、フェラーラの一聖職者によって編纂された、『フィレンツェの著述家の歴史⁷⁾』なる書物が、近年複製されて我々も利用しう。これはその当時フィレンツェに残されていた文献や書物を、数々の図書館、修道院、個人の邸宅の蔵書などを丹念に探索して作り上げられた、フィレンツェの著述家辞典に他ならない。各著者の経歴および作品が、著者の姓ではなく名のアルファベット順に配置され、巻末に姓のアルファベット順に基づく索引が付されている。勿論この辞典には多くの欠点がある。まず当時の学問的水準の低さのために、時折明白な誤りを含む。たとえば、Enzo 王や Guido Guinizelli らが、何故かフィレンツェの著述家として、本書の中に採用されている⁸⁾。第二に、本書が著者の没後刊行されたという理由⁹⁾もあって、収録された著者の内実に71人もが索引から欠落するなど、甚だ杜撰である。索引と本文とスペルが異なり、判断に苦しむ場合も少なくない。第三に、採用の基準がややあいまいで、範囲が明確ではない。おまけにその編纂方法から当然予測される通り、利用された図書館や蔵書の偏りによって¹⁰⁾、当然あまり公平とはいえぬ選択が行われているに違いない。ある特定の「家」に対しては基準が甘くなっている可能性が大きい。第四に、これもきわめて重大だが、著者がイエズス会士で、枢機卿に献本されている¹¹⁾という事実から、著者の聖職者としての立場や判断が、勿論この書物に反映していることを覚悟しなければならぬ。

こうした様々な欠点にもかかわらず、知的生産性と「家」との関連を探るという本論の目的にとっては、やはりこの書はかけがえのない資料であるといえる。第一にこれだけくわしく、当時残されていた文献を探索した資料は他に存在していないし、個々の項目に当たると、かなり忠実に調査結果を伝えていることが感じられる。これだけの労力を賭けている以上、故意に偽の資料をまじえて、その質を落とそうとしたとはとても考えられないのである。また採用の基準があいまいである点も、かえってこの資料の価値を高めているといえなくもない。何故なら、近代の研究者にしばしばみられる、正確さを追求する余りの過度の切り捨てが行われておらず、フィレンツェ出身者およびその縁故者なるべく巾広くとり込もうとしているために、本論のような考察に

際しては行届いた資料となりえているのである。本論の考察においては、たとえば『家族論』中に描かれた Alberti 家のように、現在亡命中でフィレンツェに居住していなくても、かつてフィレンツェ市民であり、その生活様式が保持されていると考えられる場合、当然フィレンツェの「家」と見なして考察する。だからその創作活動を主に市外で行った Dante のみならず、生涯ほとんど父祖の地とは深い交わりを持つことのなかった Petrarca ですら、その生い立ちや父親の影響等を通して、フィレンツェの「家」とは無縁ではない。こうしたややあいまいだが、深い洞察を許容してくれる立場に立つ時、この辞典の柔軟さは、近代の学者たちの厳密な資料よりも却って有効になることすらありうるのだ。とりわけこの著者の示す、フィレンツェ市民の著述活動の全体像を把握しようとする態度は、我々の考察にとって、何ものにも代え難く貴重である。たとえその試みが必ずしも完全に成功していないとしても、貪欲に可能な限り全体として取り込もうと企てたために、少なくとも著者の価値判断に基づく恣意性だけは免れている。またその変化を追及すれば、たといえかに不完全なものとはいえ、一応全体の動態を把握しうるのである。この全体的動態の把握こそ、まず我々が目標とすべきことで、客観的叙述の第一歩ともいうべきものであるが、多くの研究において、個別的な分析に終始し、論じられている現象が全体の中でどの程度の比率を占めているのか理解に苦しむ場合が少なくないのである。

第二章 フィレンツェの著者数の増加と知的生産階層の存在について

Enzo 王のように、フィレンツェとの関係が特になかったと思われる人々を除外すると、著者の収録数は1652人にのぼり、出身「家」数は876に達する。輩出した著者の多い順に表にして示すと、第1表の通りである。

第I表

著者数	家の数	延べ人数	著者数	家の数	延べ人数
31	1	31	8	6	48
29	1	29	7	8	56
17	1	17	6	8	48
16	3	48	5	11	55
14	3	42	4	30	120
13	1	13	3	44	132
11	4	44	2	154	308
10	4	40	1	594	594
9	3	27	総数	876	1652

この表でも明らかな通り、各「家」の平均著者数1.88（小数点以下2ケタで切り捨て）で、全876「家」中1人しか著者を出さない「家」は594、総「家」中67.8%と約3分の2を占めている。今後の分析の目安として、1人の「家」をA、2～4人の「家」をB、5人以上輩出させた「家」をCと3つのグループに分けると、Aグループが594人（35.96%）、Bグループが560人（33.89%）、Cグループが493人（29.84%）とおおよそ3分することができる。Cグループに属する「家」は、その数が54在存する。ということは、それらの「家」が中世以降18世紀の初頭まで、平均してフィレンツェ市の3分の1弱の著者を出し続けたことを意味し、やはりコンスタントに知的創造を担い続けて、この都市の高い知的生産性を支えた少数の「家」が存在していたことが分る。

なおここで参考のために、共和政時代の2大役職、プリオーレおよびゴンファロニエーレ・デッラ・ジュスティツィアの占有度と比較してみると¹⁾、その場合上位2%弱の30「家」が全体の16.75%、上位5%の76「家」が全体の32.10%を占め、またその場合の総「家」数の32.17%をし

める、1度しかいずれかの役職に就任しなかった488「家」が、総役職回数のわずか3.88%しか占めていない。他方著者数の場合には、すでに見た通り、最下位のAグループ594「家」が、役職の場合の最下位グループ9.52倍にあたる36.96%を占めて、寡占ぶりははるかに低いといえる。これは、著作の場合には絶対数がはるかに少ないことや、意欲や能力次第で誰でも執筆できたのに、役職の場合には、様々な条件に縛られて、絶対数がはるかに多い（G-M表では12571回）割に、就任することが困難で、特定の人々に集中する傾向が顕著だったことの現われである。もっとも著作の場合でも上位2%の18「家」（10人以上の階層）が264人と全体の15.96%を占め、また上位約5%の43「家」となると、443人（26.81%）と、総人数の4分の1強を占めており、頂点にある「家」々の占有度には大差がみとめられないこと（ただし絶対数は相当違うが）が注目される。このことも、先に述べた知的生産活動の核となる「家」々の存在を裏付けているといえる。

ところで、A、B、Cの各集団が、それぞれの時代に占めている割合の変化はどうであろうか。多くの記事が余りにも断片的であるため、不明や誤差は避け難いが、あえて時代別および集団別の一覧表を作製すると次の通りである。

第Ⅱ表 各時代順に見た階層別著者数（人数とは同じ「家」出身の著者数）

人数 世紀	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	13	14	16	17	29	31	小計
11以前	2																	2
12	5				1													6
12～13	2	1			1													4
13	12	4	1	8	2		1	2			4							34
13～14	16	5	6	3	1	2								1	2			36
14	30	17	5	6	1	2		2		3	1		2	8	3	1		81
14～15	18	14	9	7	3	4	2	3		5	3	1	2	5	1	2	3	82
15	52	32	13	12	7	5	3	7	1	7	4	1	6	5			6	161
15～16	49	26	7	18	5	9	6	11	5	2	7	3	4	5		4	5	166
16	115	67	29	26	7	7	18	10	11	7	12	6	11	9	3	14	10	362
16～17	87	62	24	12	10	4	12	4	6	5	3	1	7	3	2	3	4	249
17	77	31	19	5	6	9	8	4	1	2	4		3	5	2	3	1	180
17～18	13	7	1	1	2	1	1	1		2		1					1	31
不 明	116	42	18	22	9	5	5	4	3	7	6		7	7	4	2	1	258
計	594	308	132	120	55	48	56	48	27	40	44	13	42	48	17	29	31	1652
「家」数	594	154	44	30	11	8	8	6	3	4	4	1	3	3	1	1	1	876

この表によってまず注目されるのは、総数の変化である。まず最初、12～3世紀にまたがる著者数は、ほとんど散発的であって、偶然の産物に近いのであるが、13世紀に入って従来の8～9倍、ほとんど一桁違いといっても過言ではない、多数の著者が輩出し始める。厳密な年代は明らかにできないが、これが私の指摘したモンタペルティとベネヴェントとの両戦争による飛躍の時

期とほぼ一致していると見て差支えないであろう。それ以後16世紀に至るまで、一度も後退現象がみとめられないことも、大いに注目すべき事実である。これは中世ルネサンスという既成概念をもって眺めると、さして特異な現象のようには見えないかも知れない。しかし Bec の14世紀の著述家の統計表²⁾などを見ると、むしろ多くの都市で若干の消長がみとめられるのが普通である。たとえば14世紀を3世代に分けて、出身著者数を比較した表で調べると、ミラノは0—0—0、パドヴァは8—2—2、ヴェネツィアは4—2—4、ボローニャは3—3—3、ピサは4—2—3、シエナは比較的高く4—6—6、ペルージア2—4—0、ナポリは0—0—2であるのに対し、フィレンツェのみが11—18—18の高水準と飛躍を続けていた。シエナにこそ多少の高揚がみとめられるが、この段階では、やはりフィレンツェのみが離陸し、飛翔しつつあったのに対して、パドヴァのごとき極端な落ちこみは例外だとしても、他の都市は低迷を重ねて仲々飛躍できなかったことが分る。なおシエナ自体古い都市だが、隣国フィレンツェの刺激が当然認められるはずである³⁾。また Visconti 家の主導権の下で、強大な君主国に発展しつつあったミラノの低調ぶりが注目に値するであろう。やはりフィレンツェとミラノの差は、単に政治体制の違いなどには解消しえない、市民の生活様式の質的な違いとして促えられるべきであることが推測できる。そのフィレンツェとて、13世紀前半までは大差のない状態にあったのだから、気候や風土、あるいは遺伝による頭の良さなどといった自然条件では説明できない差異であることは明白である。またたとえばフィレンツェの隣国シエナの高率ぶりを考慮すると、それが単に富の集積や経済力で説明しえないことも明らかである。

さて再び本論の第II表に戻るが、13世紀の後半以後、約二期を終るごとに、40→80→160→320という 40×2^n の近似値に当る倍増を3度重ねて、16世紀のピークに至る。16世紀に生きた著者たちの数は320よりはオーバーしすぎているが、凋落直前の過熱現象として説明しうるであろう。勿論、時代への分類の規準が相当あいまいである上、不明の人数も多いので、余り細かい数字を重大視しえないけれども、ここに見られる総数の変化は、かなり重要な事実を我々に示してくれているといえるのではないだろうか。すなわち、フィレンツェでは、著者の数が一挙に上昇したのではなく、核分裂のように3度に亘って連続的に倍増していったという事実である。そういえば、先の Bec の表でも11—18という、倍増に近い増加がみとめられており、我々の数値も全くデタラメなものではないといたいのである。

特にこの変化を見て私が重視したいのは、そのリズムの一貫した連続性である。我々は、当初40人足らずであった著者数が、ピーク時には360人にも達したと知ると、ともすればその絶対数の差にのみ目を奪われ勝ちで、40人の時期とでは全く断絶した異質の世界のように考えやすいが、その間に二世紀余りの期間があり、ほぼコンスタントなリズムで倍増を重ねたと知ると、その増加は断絶の結果ではなくて、連続した発展であったと考えざるをえないのではないだろうか。勿論量は質を変化させ、360人体制では、40人体制には考えられなかった高度の成果が生れるのは当然である。しかしそうした変化に目を奪われるあまり、フィレンツェ文化史にみとめられる連続性

を忘れてはならないのである。フィレンツェ文化史に、真の意味の断絶、質的転換の時期を求めるとすれば、それはやはり、13世紀中葉に、それまで散発的だった著者が一挙に34人に飛躍した時期に求めるべきなのである。36人から81人、82人から161人、166人から362人という変化の方が、絶対数が多いために目につきやすいけれども、倍増という現象は、生物の繁殖などにも見られる通り、むしろ自然で連続的な変化であることは、今さら私が指摘するまでもあるまい。だから Hans Baron や Holmes⁴⁾ などが重視する Gian Galeazzo 戦争や、Otto Santi の戦いなどは、勿論その意義は否定しえないとしても、13世紀中葉の変化に比較すると、既定のルール上の主要駅にすぎないといえる。残念ながらこれまでフィレンツェ文化史のこうした大まかな枠組は、誰にもはっきりとは把握されていなかったのだ。

ところで、このような増加の時期に、「家」が占めていた役割はどうであっただろうか。各時期を各個に分析していたのでは紙数を取りすぎるので、特に2度目と3度目の倍増期を含み、いわゆるルネサンスの時期とよばれる14～15世紀より、16世紀までの期間を一区分として中間に設け、その前後を比較してみることにする。このルネサンス期には、勿論著者の絶対数は圧倒的に増加し、そのピークに達しているのであるが、A、B、C三集団の占める比率には、いかなる変化が認められるであろうか。各集団の総数と比率とを示すと、第Ⅲ表の通りである。

第Ⅲ表

三集団のしめる比率の変化

時代 \ 集団	A (1人)	B (2～4人)	C (5人以上)
中世	67 (41.10%)	56 (34.35%)	40 (24.53%)
ルネサンス	234 (30.35%)	260 (33.72%)	277 (35.92%)
ルネサンス以後	177 (38.47%)	162 (35.26%)	121 (26.30%)
時代不明	116	82	60
総数	594 (35.95%)	560 (33.89%)	498 (30.14%)

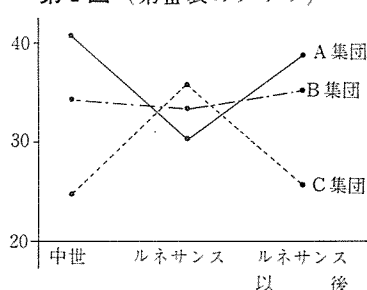
時代に比例配分しても、A集団のシェアを各時代共多少アップする程度で、ルネサンス期におけるC集団の絶対数を越えることはありえない。第Ⅲ表の結果を、グラフで示すと第Ⅰ図の通りであり、A集団とC集団が、ルネサンス期に地位を逆転し、さ

らにルネサンス以後には元の順序に戻っていることが明らかに見て取れる。しかも各集団のシェアがほぼ中世の水準に戻っている、という興味深い現象がうかがわれる。これによって分けることは、ルネサンス期とは、ある階層の「家」々が、特に知的生産活動に集中したという事実他にない。たしかに全市挙げて著者の数は増加しているが、特に一部の階層の参加が著しかったのだ。

この表によると、本来絶対数では多数を占めるA集団は、中世では4割余りを占めていたのに、ルネサンス期には10.75%ものシェアをへらし、絶対数でも最下位に落ちこむ。それとは対照的に、5人以上の著者を出したC集団は、かつて中世においては全体の4分の1足らずだったのが、3分の1強を占めて、絶対数でも断然トップの座を占めるに至る。またその中間の、2～4人を輩出させたB集団

は、ほぼ全体の3分の1のシェアを保ち続ける。なおA集団には、時代が不明の著者がかなり多いが、その差分を各

第Ⅰ図 (第Ⅲ表のグラフ)



この点からも、ルネサンスが市民のあらゆる層を同程度にまき込んだ精神運動ではなくて、特定のエリート層を特に刺激したことが明らかである。勿論これは今さら取り立てていうほどのこともない自明の事実ではあるけれども、シェアの逆転という形ではっきりと現われていることが興味深い。

第三章 C 集団54「家」の分類と文化的指導力の重要性

前章でフィレンツェには特に多くの著者を出した「家」が存在し、特にCグループに数えられた54「家」は、全体の約3割の著者を出し、特にルネサンス期にはその飛躍ぶりがめざましかった（中世における同グループの6.92倍、B集団では4.64倍、A集団ではわずか3.49倍）ことを眺めた。では、ルネサンス期の主な担い手ともいべきその54「家」とは、具体的にははたしていかなる「家」であろうか。その共通的な性格を知るために、極めて著名な三つの文献を手がかりとして分析を進めたい。以下がその調査結果である。

第IV表 上位54「家」の順位および3作品との関係

順位	「家」名	人数	D.	G.V.	M.S.	備考	順位	「家」名	人数	D.	G.V.	M.S.	備考
1	Medici	31	×	○	○		28	Antinori	7	×	×	○	
2	Strozzi	29	×	○	○		*	Barberini	*	×	×	○	
3	Bardi	17	×	○	○		*	Bonsi	*	×	×	○	
4	Acciaiuoli	16	○	○	○		*	Niccolini	*	×	×	○	
*	Albizzi	*	×	○	○		*	Pitti	*	×	×	○	
*	Capponi	*	×	×	○		*	Rossi	*	×	×	○	
7	Alberti	14	×	×	○		*	Segni	*	×	×	×	ほろろで 活版屋
*	Martelli	*	×	×	○		*	Stuffa	*	×	×	○	
*	Rinnuccini	*	×	×	○		36	Da Filiceia	6	×	×	○	
10	Salviati	13	×	×	○		*	Nardi	*	×	×	○	
11	Cavalcanti	11	○	○	○		*	Sacchetti	*	○	○	○	
*	Neri	*	×	×	○		*	Salvetti	*	×	×	○	
*	Pazzi	*	○	○	○		*	Soderini	*	×	×	○	
*	Rucellai	*	×	○	○		*	Tedaldi	*	×	×	○	
15	Corsini	10	×	×	○		*	Verini	*	×	×	○	
*	Nerli	*	○	○	○		*	Vallori	*	×	×	○	
*	Ridolfi	*	×	×	○		44	Anselmi	5	×	×	○	
*	Ricci	*	×	○	○		*	Berti	*	○	×	○	D. ?
19	Alamanni	9	×	×	○		*	Dati	*	×	×	○	
*	Aldobrandini	*	×	×	○		*	Davanzati	*	×	×	○	
*	Guicciardini	*	×	×	○		*	Carducci	*	×	×	○	
22	Accolti	8	×	×	○		*	Fortini	*	×	×	○	
*	Adimari	*	×	○	○		*	Gualterotti	*	○	○	○	D. ?
*	Gaddi	*	×	×	×	ほろろで 活版屋	*	Neroni	*	×	×	×	法律家もし
*	Pandolfini	*	×	×	○		*	Pulei	*	○	○	○	
*	Pucci	*	×	×	○	C.S. ?	*	Della Rena	*	×	×	○	
*	Ubal dini	*	○	○	○		*	Uberti	*	○	○	○	

?は連続性に疑問のあるもの

れる)のフィレンツェの主要な「家」が列記されている。Dante一流のほのめかしを用いているため、必ずしも明確ではないが、16世紀の学者 Vincenzo Borghini は、そこに42「家」が述べられ、その親戚を含めると53「家」もしくは、Cacciaguida の生家と考えられた Elisei を含めると、54「家」に及ぶと考えている⁴⁾。しかし Dante は、その詩篇の他の箇所でもフィレンツェの故事を度々とり上げている⁵⁾。それは主にゲルフィ党対ギベッリーニ党の戦い以後、白派對黒派

分析のために用いた三文献とはまず Dante Alighieri の Divina Commedia¹⁾ (D. と略)、次は Giovanni Villani の Cronica Firenze 1823年版の索引²⁾ (G.V.), 最後は Marchionne di Coppo Stefani の Cronica Fiorentina (M.S.)³⁾ で、それらに各「家」の成金が採り上げられているかどうかを調査した結果が、第IV表である。Dante の Divina Commedia は周知のごとく14世紀初頭の作品であるが、その第三部に相当する Paradiso の canto XVI には、詩人 Dante の曾祖父の父親にあたる Cacciaguida が、その存命中(1106年生れなので、12世紀前半と考えら

の戦いに至る時期を扱っているのが、Cacciaguida の時代と約一世紀余りのずれがある。第 IV 表の二重マルは、Cacciaguida が述べたら54「家」に属するもの、一重マルは13～4 世紀の事件に関与している「家」である。

G. Villani は、1848年1月のドイツの地震まで記すが、この索引は彼が記載した全ての「家」を網羅しているのではなく、重要事件に関係した人や「家」のみを採録している。だから Dante よりは網羅的だとしても、やはり目立った「家」だけが取上げられている点で前者に似ている。扱った時期には Dante の詩編に対し一世代の延長があると見てよいであろう。

第三の Marchionne di Coppo Stefani の作品は、極めて簡潔にだが、天地創造より語り始められて、1385年1月1日に生じた4分の3の部分日食および、1月15日夜の月食の記事で終わっている。二つの年代記が、たまたま自然現象の記事で中断されているのは、何となく興味深い。要するに、Marchionne の作品には、G. Villani よりもさらに37年後までの事件が含まれている。しかもさらに重要なことは、この年代記中には、フィレンツェ共和国のプリオーレおよびゴンファロニエーレ・デッラ・ジュスティツィアの名簿が記載されているということであって、G. V. 索引と M. S. とを比較すると、後者が一挙に32「家」(59.25%) もふえているのは、単に扱われた時代が約一世代延びているためというよりも、むしろ G. V. 索引には重要事項に関連した「家」や個人のみが取り上げられているのに対して、M. S. の年代記に二大役職の名簿が付けられており、そこに挙げられた人名の出身「家」をすべて網羅しているために生じた差違である。

以上三文献の記載状況によって、C 集団の54「家」は、以下の通りに分類しうる。

I. まず12世紀前半にすでに有力だった二重マルの「家」が7 (12.96%)、ただしその内後代とのつながりがありやしいものが2あるのでそれを引くと5「家」(9.25%)、あやしいものの内 Gualterotti は連続の可能性が高そうであるが、いずれにせよ、この集団は約1割である。

II. 次に Divina Commedia に記載はあっても、13世紀以降の事件に関するもの4 (7.4%)、これは次のIIIのグループとほぼ重複しているといえる。つまり、同時代に属して、特に目立ったため、Dante の D. C. 中に歌われてしまったものと見なしうる。

III. 次に Dante には記載されていないが、G. V. 索引には記載されている「家」数が8 (14.81%)。逆に Dante にあって G. V. 索引にない「家」は、わずか Berti 「家」1 にすぎない。実はこの Berti は後代との連続性が疑わしく、むしろ M. S. のみに記載されたグループである可能性が大きい点を考へると、G. V. 索引は、そのかなり恣意的性格が強く感じられる作成ぶりにもかかわらず、意外にフィレンツェの重要事件を網羅的な仕方では把握していることが分るのである。

IV. だが54「家」中最も大きな比率を占めているのは、Dante にも G. V. 索引にも見当らなくて、Marchionne にのみ記載されている32「家」(59.25%) である。Berti 「家」もこのグループに属する可能性が高く、その可否はとも角としても、全体のほぼ6割はまさにこのグループに属している。

V. 最後に、3作品のいずれにも属さない「家」はわずか3「家」(5.55%)にすぎない。

以上の分類を基にして、前章のC集団を古さを基準としてさらに再分類すると、まず12世紀前半から有力だった「家」が5乃至7(9.25%又は12.96%)存在する。この集団は文句なしにフィレンツェの旧家であって、その中には Sacchetti 家のような勝ち組と、Uberti 家のような負け組があるが、そこに文学史上名高い、Franco Sacchetti, Luigi Pulci, Fazio degli Uberti などの実家がみつめられることは極めて興味深い。Sacchetti の文学なども、単にフィレンツェの市民階級全体の声を代表しているわけではないのであり、その冷笑癖や外人傭兵隊長への共感、あるいは法律家、医師等の専門家階級への嫌悪感などは、こうした出自ときわめて密接に関連していることが推測しうる。Pulci の文学などにも似た性格が感じられるのではないだろうか。De Sanctis 以来しばしば指摘される、Sacchetti 文学と Boccaccio 文学との違いなどにも⁹⁾、単に世代の差などには解消しえない視角の差が存在していること、またすべてを時代精神や、大ざっぱな階級意識に帰することは到底できないことは、いくら強調してもしすぎないであろう。

このC-i グループに関して注目すべきことは、その出自の古さにもかかわらず、13世紀以前の著者はわずか1人(Vallombrosaの修道士で、11～2世紀に生き、多くの説教の草稿が残っているとされる聖人 S. Bernardo degli Uberti⁷⁾)しか収録されていないという事実であろう。つまり少くとも5家存在し総数33人(あるいは7家で43人)の著者を生んだこの集団から、13世紀半ばごろまでには、1人の聖職者以外には著者が現われなかったというわけで、32人及至42人はそれ以後に出現しているということになる。G. Villani はフィレンツェの大火の記事も記しているので⁸⁾、文献が焼失した可能性も勿論あるけれども、5～7家でただ1人という事実から考えると、やはり13世紀半ば以前にはフィレンツェの知的活動は低調であり、Dante が記した代表的な旧家ですら同様であったとみとめざるをえないだろう。ということは、フィレンツェに本来的に知的活動を好む傾向があったわけではなく、それがあつた時から発達し始め、前章で述べたようなリズムを伴って展開していったことを意味している。後代ほど富裕でなくとも、少くとも代表的な勢力家に数えられるほどの「家」なら、もしそうした好みが生じていさえすれば、多少の著述活動を十分保証しえた筈なのに、13世紀以前にはそうした「家」からも著者は現われなかった。つまり13世紀以前には、フィレンツェにおいても「家」には知的生産活動を支える意欲がなく、教会や修道院にもっぱらその役割を委ねていたことを、象徴的な形で示しているといえるからである。やはりモンタペルティーベネヴェントの頃の気風の変化が決定的に重要である。

次に前述のIIおよびIII項で扱った「家」12(22.22%)をC-ii グループと呼ぶ。これらは、13～4世紀のもろもろの紛争において、フィレンツェの指導的立場で活躍したため、Dante のD. C. や、G. Villani の年代記の重要事件のみを採録した索引にも記載されるほど目立っていた「家」であり、まさに14世紀中葉までの指導者層そのものであるといえるだろう。実は第IV表の上位5「家」はすべてこのグループに属しているのであり、それだけで延べ109人、全体の6.59%をしめている。この事実によっても、フィレンツェの知的生産性と、政治的および経済的な指導力との間

には密接な関係があることが明らかである。ただし、単純な経済決定論で、単に経済力のある所で文化が生れるなどという生やさしい関係を見出すだけでは甚だ不十分であって、フィレンツェの政治権力や経済力なるものが、知的創造性や論理的説得力などを直接の基盤としていたという事実を把握しなければなるまい。Medici, Strozzi, Bardi, Acciaiuoli, Albizzi という上位5「家」に、Cavalcanti, Pazzi, Ricci, Rossi「家」等を加えると、ほとんどフィレンツェ共和国の政争の骨組ができ上るといっても良い程である。こうした結果から考えると、フィレンツェ共和国においては、いわゆる構造から文化へという、下から上への影響よりも、文化そのものが、市民生活を支配、左右する傾向が強かったと判断される。たとえば Medici 家の政治力一つにしても、その根拠としてしばしば強調される財力よりも、むしろより包括的な知的先見性や構想力などに負っている要素が大きいのではあるまいか。たとえば前代の Bardi 銀行や Acciaiuoli 銀行は、Medici 銀行に比して、さして遜色のない規模を誇っていたとされているが、市政に及ぼしたその影響力の差は、一見合理的と思われる寡占度の差による説明だけでは十分ではあるまい。我々は19世紀的経済決定論に余りにも呪縛されすぎていたため、あらゆる現象の裏に経済的基盤の変化という「本質」を読み取ろうとし、何とかそれらしきものを促えたことで満足しがちであったが、実際にはそれも現象の一側面にすぎない場合が少くないのではあるまいか。少なくともここまではっきりと、権力と知的生産性の相関関係がみつめられる以上、フィレンツェ史における知的活動の影響力の重要性について、さらに深く考察されるべきであると思われる。またこうした見地に立つと Medici 家の政治力やその時代についても、従来の芸術保護や投資という立場を越えて、その知的創造力や指導性をより重視した見方が必要になるのではあるまいか。

さて、何といてもC集団54「家」中の32「家」と圧倒的多数を占めているのは、G. V. 索引には記載されていないが、Marchionne に記載されるか、あるいはむしろその二大役職の表の中に拾い上げられているC-iii集団である。このC-iiiグループ中には、例のAlbertiをはじめ、Ridolfi, Guicciardini, Ptti, Soderini, Vallori など、ほとんどiiグループにひけを取らぬ、錚々たるメンバーが含まれている。勿論これらの「家」がG. Villaniの年代記に全く記載がないというのではなく、ただ1823年版の索引に出るほど目立たなかったというだけの違いで、その間に何らかの本質的な差異があるわけではない。にもかかわらず、14世紀半ばまでに頭角を現わしたか否かで、全体としては、両集団の間に微妙な差異が感じられることも否めないのではあるまいか。L.B. Alberti と Francesco Guicciardini とが似ているなどという余りにも主観的にすぎるかも知れないが、Francesco Guicciardini と ii グループに属する「家」出身の Giovanni Cavalcanti⁹⁾ とでは、やはり相当の差が感じられ、いずれも出身の「家」に規定されている要素が顕著にみつめられるといえることは確かであろう。特にiiiグループには、時代の流れに基づき、後のMedici 政権に対して協力的な「家」が多いようで(ただし勿論 Pitti 家のように向背が定まらないのが通例である)、このことがかなりこのグループを特色づけているといえるだろう。

最後に三資料のいずれにも含まれていない「家」が3存在するが、このC-ivグループが全体

のわずか5.55%(M. S.表との連続性がうたがわしい Pucci をC-iii集団からくり入れても4で、7.40%)にすぎないという事実が何よりも驚くべきことのように思われる。その3「家」ではいずれも聖職者や法律家などの職業や、活躍時期に偏りがみとめられ¹⁰⁾、何か特別な条件がないかぎり、少くとも14世紀までに二大役職に就任する(アルテの有力メンバーを意味する)ことなしにはC集団に加わりえなかったことが推察される。やはりここでも、政治権力と知的生産性との意外に密接な関連性が見出されるのである。

第四章 フィレンツェの知的生産性発展の原動力と見なしうる世俗性

前章でC集団について論じたが、本章でBおよびA集団について考察した後、全体のまとめを行うことにしたい。C-iiとC-iiiの集団にはっきりした境界が設け難いと同様、C集団とB集団の間にも、それほどはっきりした境界があるわけではない。特にB集団中で、著者を4人出した「家」の場合、C集団とは紙一重の差しかないといえるだろう。参考のためにそれを列挙すると、次の30「家」である。Aligieri (ママ), Accorsi, Altovita, Arrighi, Bartoli, Del Bene, Benivieni, Bracciolini, Bruni, Cambi, Canigiani, (Da) Castiglionchio (Zanichiniを含む), Castrucci, Cattanei, Cioffi, Donati, Doni, Gherardi, Ginori, Landini, Macchiavelli, Malespina, Manetti, Mazza, Paoli, Parenti, Rondinelli, Scala, Vespucci, Vettori。ちなみに、AligieriとはDante Alighieriとその子孫で、周知のごとく、Danteの子らは当時の成年に達すると市外に追放されて¹¹⁾父の許に赴き、後にD. C.の注釈を書くなどしたが、その活躍場所はどこであれ、フィレンツェとの関係が重要である。この資料はたしかにいろいろと疑問の余地が多いけれども、フィレンツェの文化的影響をかなり総体的に把握している点で、近代的な厳密な方法では見失い勝ちな要素をすくい上げていることが分る筈だ。Danteを祖とするAligieri家の場合と同様、Bracciolini家はPoggioという大物学者によってこのランクに入ったし、Leonardo Bruniの属するBruni家などもこの仲間に認められる。この段階になるとそうした偉大な先祖を持つとか、Accorsi家²⁾のように代々すぐれた法学者を出すなど、いわば異能派とでも呼ぶべき型の「家」と、AltovitaやDonatiなど政治的に有力³⁾だった、本来ならC集団に加わっているべき勢力派の「家」とが混在している。Macchiavelli家などは、Canigiani家⁴⁾などと共に、明らかに後者に属し、ほんのちょっとした偶然の結果B集団に加えられているのである。それに対してAmerigo Vespucciに代表されるVespucci家⁵⁾などは、他にすぐれた自然学者Bartolomeoや学才のある聖職者を2人出してこのクラスに属するが、前者の性格が強いといえるだろう。フィレンツェの知的生産階級は、Acciaiuoli家⁶⁾に代表されるように、法王庁やナポリ王国などの高級事務官僚の母胎となると共に、Pegolotti⁷⁾(残念ながら本資料には、この名でもBalducciでも出ていない)をはじめ、Bonaccorso Pitti⁸⁾、報告書簡のNiccolo Macchiavelli⁹⁾等々すぐれた記録者および情報伝達者を生み続けたが、Amerigo Vespucciもこうした伝統の下で生れ成長したのであり、突然変異的な孤立した存在ではなかった。新発見の両大陸に、さして由緒があるわけ

でもないフィレンツェの一市民の名が冠せられたのには、やはりそれだけの歴史が作用しているといえるのではなからうか。

大分横道にそれたが、ついでに3人の著者を出した「家」を列挙すると以下の44「家」である。Adriani, Allori, Arrighetti, Bonciani, Barducci, Bartolini, Betti, Bonini, Boninsegni, Casini, Ceffini, Cerchi, Cini, Cocchi, Corbinelli, Falconieri, Frescobaldi, Galilei, Guiducci, Gondi, Leoni, Lottini, Giacomini, Da Majano, Manelli, Marescotti, Marzi (Mediciの一支脈か), Mellini, Del Migliore, Migliorati, Mini, Minorbetti, Naldini, Panciaticchi, Ricasoli, Rigogli, Rilli, Rinaldi, Salvini, Spinelli, Tornabuoni, Varchi (又はDa Montevarchi), Vecchietti, Villani。

Donatiが4に対してCerchiが3と白黒闘争のライヴァルはほぼ互角である。この階層にもCerchi, Frescobaldiなど、古い時代に権勢を誇った後に没落した「家」、Ricasoli¹⁰⁾のような後にイタリア王国の宰相を出す生粋の封建貴族、やや後発だったが、共和政下後半より、大公国時代に大いに繁栄を誇ったGondi家¹¹⁾など勢力派も多いが、音楽理論家であり数学者でもあった父の血をひいて天才を発揮したGalileo Galileiの一族¹²⁾や、兄弟と甥とで年代記を書き残したVillani家¹³⁾など、まさに異能派そのものもまじっている。このように本資料は、特別の著名人しか採用されていない近代の文学史や科学史とは異って、玉石混交であることは否定しえないが、かえってそのために鳥瞰図ではうかがえない、まさに虫瞰図的なフィレンツェの知的生産の実態をある程度把握してしてくれるのである。2人の著者を出した「家」の名前は省略するが、このB集団には、先に見たC集団に比して、異能派が多いことが一つの特長といえるであろう。長年権力の頂点にあったMedici家¹⁴⁾は別格であるとし、またAccolti家¹⁵⁾のように法律家を多く出した異能派型の「家」があることを考慮しても、やはり一般的にはC集団に加わるには、市政全般に作用しうような規模が必要であったといえそうである。たとえば先に引用したLionardo Albertiの証言によって、彼らがある家業においてではなくて、驚くべき多様な分野に人材を出していることを見たが、これがC集団の一般的特長であった。

ところで、当時の知的生産の条件を考える時、聖職者階級を無視しては極めて不十分で片手落ちなものとならざるをえないだろう。何故なら、中世の知的生産における聖職者階級の重要さは当然予想される通りである上に、さらにイタリア独特の現象が¹⁶⁾加わることも想像しなければならず、それらをあわせて考える必要があるからだ。ところで、本資料は、著者が聖職者であり、高位聖職者に献呈されている事実や、記述態度そのものによっても明らかな通り、カトリック思想に対してはきわめて忠実であり、また聖職者の功績を大いに尊重する傾向がみとめられる。こうした記述態度は、たとえば思想史研究などにおいてはこの資料の大きな限界と見なされるが、我々のようにフィレンツェにおける知的生産活動に対する聖職者たちの貢献度を調べようとする場合には、かえって大きな有効性を発揮してくれる。というのは、聖職者たちの教会での地位や、修道院の役職などを、我々には不当と思われる程に重大視して記しているからで、少くとも叙階

された聖職者に関してはその記述を怠っていないと予想しうる（勿論古い時代に関しては、遺漏や誤りがないとはいえないのは、この辞典の宿命だが）のである。そこで、再び時代別に、聖職者の数を計上すると次の通りになる。聖職者階層の不明の比率がかなり低いことも注目される。

第Ⅴ表 時代別聖職者数（人数とは同じ「家」出身の著者数）

時代	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	13	14	16	17	29	31	小計	総数比率
12以前	7				1													8	100.00
12～13	2	1																3	3
13	8							1			1							10	29.41
13～14	5	1	1											1	2			10	27.77
14	14	3	1			1				2	1			1		1		24	29.62
14～15	15	3	2	4		1		2		2	1		1	1			1	33	40.24
15	19	13	5	5	1			1									3	48	29.81
15～16	19	10	2	6	2	1	2	8	1	1	3	2	2	3			3	65	39.15
16	49	24	10	12	1		4	4	2	3	7	1	5	2	1	4	1	130	35.91
16～17	51	30	6	2	3	3	10	3	4	4	2	1	1	1		2	2	125	50.20
17	26	18	14	5	1	2	1			1	1		1	1		1	1	73	40.55
17～18	5	3		1			1			1							1	12	38.70
不明	27	9	3	6		2	2	2	1	2	1			2		1		58	22.48
計	247	115	44	41	9	10	20	21	8	16	17	4	11	12	3	9	12	599	
総数比率	41.51	37.33	33.33	34.16	16.36	20.83	35.91	43.95	33.33	40.00	38.64	30.77	26.19	25.00	17.64	31.03	38.70	36.25	

時代別に総数との比を眺めると、12世紀以前には100%、12～3世紀にも75%と、当然古い時代には聖職者が圧倒的多数を占めるが、13世紀に生きた著者数中の比率が突然下落して3割以下になり、同水準が三世代足らず続いた後、14～5世紀にやや高率に戻る。15世紀に生きた著者数で再び下降した後反転して、16～7世紀には50%を越す高率に昇る。それ以後も4割代とフィレンツェとしては高率が続く。中世の高率と、16～7世紀以降の対抗宗教改革によるものと思われる高率は、その理由が推定できるが、それ以外の波動の意味は十分理解できない。なお前に見た三

第Ⅵ表
三集団による聖職者の比率の変化

時代	集団 A (1人)	B (2～4人)	C (5人以上)	計
中世	36/67 (53.73%)	7/56 (12.50%)	12/40 (30.00%)	55/163 (33.74%)
ルネサンス	102/234 (43.58%)	96/260 (36.92%)	78/277 (28.15%)	276/771 (35.79%)
ルネサンス以降	82/177 (46.32%)	79/162 (48.76%)	49/121 (40.49%)	211/460 (45.86%)
時代不明	27/116 (23.27%)	18/82 (21.95%)	13/60 (21.66%)	57/258 (22.09%)
計	247/594 (41.58%)	200/560 (35.71%)	152/498 (36.25%)	599/1652 (36.25%)

集団と三時代とにまとめると、一そう興味深い数字が現われる。

先ず総数を時代別に比較すると、聖職者の比率は中世に最も低く、ルネサンス、ルネサンス以後と、時代を経る毎に高率に変る。この比率の変化には、それほど不自然でないゆるやかな連続性、均質性が認められるようである。すでに見た通り、本資料の執筆者は、あくまでも教会を重視し、おそらく資料の探索においても聖職者を軽視していなかった筈で、また彼が求めた資料が修道院等で大切にされていたことは、時代不明者の比率の低さや、きわめて古い時代の著者が聖職者階層に独占されている事実から推察しうるはずである。それにもかかわらず、13世紀以後は俗人が高率をしめる。13世紀以前とそれ以後とに見られる、この比率の驚異的な逆転こそ、13世紀におけるフィレンツェ文化の質的転換の一証左といえる。まさにこの時期に、フィレンツェは教会直系のゲルフ党の都市から一挙に生れ変わったのであり、ヨーロッパ文明が、全体としては漸次に教会の影響から脱したのに対して、フィレンツェでは一挙に教会ばなれした知的生産が開

始されたといっても過言ではない。その時期はすでに何度も述べた13世紀後半で、以後の変化には連続性がみとめられるといえる。ここでもモンタペルティ及びベネヴェントの両戦争の時期に生じた変化が、フィレンツェ文化史の流れに決定的な影響を及ぼしたとする仮説は一つの補強材料を得、Otto Santi 戦争の影響でフィレンツェ人の精神が教会から解放されたとする Holmes 等の説は、一連の流れの一過程を強調しているに過ぎないことが推論しうる。Boccaccio や Sacchetti のノヴェッラにみとめられる聖職者批判も、こうしたデータに立って読み直す必要があるように思われる。

さらにくわしく第VI表の各欄を検討する時、我々が最も意外とするのは、B集団の中世の欄に現われた聖職者のわずか12.50%という低い比率である。これはA集団の4分の1以下という驚くべき低率で、まさに信じ難い数字であるが、何度検討してもその人数はふえなかった。勿論すでに指摘したような資料の持つ限界は考慮しなければならないとしても、やはりこれだけ顕著に他の集団や時代と落差がある以上、これを無視することは許されないであろう。この数字についてはいくつかの解釈が可能である。たとえば、B集団には一芸に秀でた人物を中心とする異能型が多かったことに関連して、この時期には Dante の Alighieri 家、Villani 家、あるいは2人著者を出した Dino Compagni の実家 Compagni 家のように、世俗の中小規模の「家」に、文筆家が多く出たことや、特に Uberti 家（これはC集団だが）に代表されるギベッリーニ党や Cerchi 家に代表される白派の「家」には当然反教会は気風が強かったが、それらの「家」の多くが14世紀の半ばまでに没落したこと等の理由がまず思いうかぶだろう。しかしそれ以上に重視すべきことは、例外は多いもののやはり全体としてはB集団の「家」はC集団のそれよりも規模が小さく、教会とのコネも少なく、さらに小回りが利くために流行に敏感で、利益に対しても素早く反応したという、全般的な傾向ではないだろうか。その証拠にルネサンス期には、C集団における聖職者の比率が最低になり、ルネサンス以後では、B集団における聖職者の比率がそれまでトップを続けたA集団を押しつけて最高の位置を占める。つまり中世におけるB集団の世俗の執筆者の比率の圧倒的な高さは、フィレンツェ市民の一部が知的生産の将来に託した情熱の程度を示しているといえるのではないだろうか。この世俗度87.5%という驚くべき高率こそ、その後フィレンツェで著者数が3度にわたって倍増するに至る量的拡大の一因であったといえるのではあるまいか。いずれにせよ、総数に対する聖職者の比率が、通常のヨーロッパの都市で予想されるのと全く逆の進行を示しているという事実は、我々がフィレンツェ文化の性格を考える上で忘れてはならないもののように思われる。こうした現象は、13世紀後半以来のフィレンツェ文化の進行を一括して考えることによってのみ、理解しうるのである。

(終)

(註)

Cap. I

- 1) 『大阪外国語大学学報』第69号所収論文およびほぼ同趣旨をやや簡略化した「中世フィレンツェにおける知的生産性飛躍の時期とその契機」, 『チクロ』第2号, 京都 1985所収。
- 2) P. Jones, *Economia e società nell'Italia medievale, Dal Feudalesmo al Capitalismo, Storia d'Italia, Annali-I*, Torino 1978, pp. 185～372 所収論文, 特に p. 213 に, 当時のイタリア経済では日常品の占める比率が大きく, 領地拡大熱の基盤には, 商業圏確保の欲求があったとされている。
- 3) G. Villani, *Cronica, Lib. VI Cap. LXXIX*, なお本論では, Firenze 1823 年版をそのまま複製した Multigrafica Editrice 刊の Roma 1980 年版を利用した。これは清水広一郎氏の『中世イタリア商人の世界, ルネサンス前夜の年代記』, 東京 1982 には記されていない版だが, 清水氏が使用された Dragomanni が註を加えた版も, 原版は G. Antonelli が編纂したフィレンツェ1823年版となっているので, おそらく原版は同じものと推定される。なお, 引用は同版 Tomo II の p. 113 より行った。
- 4) L. B. Alberti, *I libri della famiglia*, Torino 1969, a cura di Ruggiero Romano e Alberto Tenenti, p. 83.
- 5) id. p. 207, また pp. 199-200. において, Giannozzo はその経験主義を披露する。
- 6) 拙稿「L. B. アルベルティの『家族論 (Della famiglia)』と『家』の理想像」, 『大阪外国語大学学報』第58号, 大阪1982所収の註5 参照。
- 7) G. Negri, *Istoria degli Scrittori Fiorentini*, Ferrara 1722 (ただし献辞の日付) を Armaldo Forni 社が復刻した, Bologna 1973 年版。
- 8) id. pp. 158-9 に Enzo re di Toscana, p. 319 に Guido Guinicelli が記載され, 逆に12～3世紀の大物学者 Boncompagno da Signa 他が欠落。
- 9) 表紙に opera postuma del p. Giulio Negri Ferranese とある。p. は padre の略号。スペルの不一致など多いが, 特に索引の欠落と本文と索引との不一致が目立つ。
- 10) たとえば Negri は, Strozzi 家の図書館を利用しているが, Strozzi 家出身の著者は29人で第2位にある。
- 11) Negri はこの書を Tommaso Ruffo 枢機卿に献じている。

Cap. II

- 1) 拙稿「系図学的資料より見たフィレンツェ共和国の二大役職と家」, 『イタリア学会誌』第29号, 京都1978 所収を参照。
- 2) C. Bec, *Lo statuto socio-professionale degli scrittori (Trecento e Cinquecento)*, Letteratura Italiana II, Produzione e consumo, Torino 1983 所収の p. 235 の表。
- 3) 14世紀を通して, フィレンツェは西方への拡大を目指し, ピサおよびルッカの獲得に努め, 1406年にピサを合併した。1269年コッレの戦いに敗れグェルフィ化したシエナとの関係は穏和となった。他のトスカーナの諸都市, ルッカなどにもフィレンツェ文化の刺激が明らかに感知しうる。
- 4) Hans Baron, *The Crisis of the Early Italian Renaissance*, Princeton, New Jersey 1966 および, Holmes については原文が入手できず, John Larner, *Culture and Society in Italy 1290-1420*, New York 1971, p. 350 より得た知識にもとづく。

Cap. III

- 1) Dante の *Divina Commedia* は a cura di Natalino Sapegno, Milano-Napoli 1962 年版を利用。勿論その索引に頼った。
- 2) Cap. I の註3) 参照, その Tomo VIII の巻末の *Indice generale delle materie contenute nella Cronica di Giovanni Villani* を利用した。
- 3) Marchionne di Coppo Stefani, *Cronica fiorentina*, a cura di Nicolò Rodolico, *Raccolta degli Storici Italiani dal cinquecento al millecinquecento ordinata da L. A. Muratori*, Tomo Trentesimo, Città di Castello. 1903 を利用, その巻末の *Indice alfabetico* による。
- 4) Vincenzo Borghini, *Storia della nobiltà fiorentina*, Pisa 1974, pp. 152-4.

- 5) 拙稿「ダンテの作品における「家」の意味」(1)および(2),『イタリア学会誌』第24号および26号所収参照。
 - 6) F. De Sanctis, *Storia della Letteratura Italiana*, Cap. X L'ultimo trecentista, において, Sacchetti 自身の嘆きを通して変化が語られている。
 - 7) op. cit., pp.108-9 (註 Cap. I, 註7) 参照)
 - 8) 古くは, G. Villani, op. cit., Lib. VI, Cap. XXX, あるいは Lib. VIII, Cap. LXXI の放火による大火など。後者は Cavalcanti 家の没落をもたらしたとされる。
 - 9) Giovanni Cavalcanti (1381?-1460?) は, 負債のため10年余り投獄されていたというその経歴一つ見てもきわめて個性的な著者だが, その *Cronaca sui mutamenti dello Stato* や, *Trattato politicomorale* には, 没落した Cavalcanti 家の子孫であることが大きな影を投げかけているようである。
 - 10) 第IV 表備考参照。
- Cap. IV
- 1) 14歳になると市外に追放された。Siebzechner-Vivanti の *Dizionario della Divina Commedia* 他参照。
 - 2) Accorsi 家は3代にわたって法学者を出す。Negri, op. cit., pp. 1, 122, 180, 181 参照。
 - 3) Donati 家は黒派のリーダーの一人 Corso の実家, Altovita (Altoviti) は, 118回と共和政時代最も多く二大役職についた一族, Cap. II の註1) の拙稿, p. 103 の表参照。この表の網羅度は8割程度。
 - 4) 前註の表で Macchiavelli 家は66回で12位, Canigiani 家は62回で18位。
 - 5) Negri, op. cit., pp. 31, 86, 297, 297.
 - 6) Acciaiuoli 家に関しては, Curzio Ugurgieri della Berardenga, *Gli Acciaiuoli di Firenze nella luce dei loro tempi*, Firenze 1962, Voll. I-II という大著がある。
 - 7) 田中英道・田中俊子「ベゴロッチェ『商業指南』・訳と註釈」,『イタリア学会誌』第33号大阪 1984所収参照。
 - 8) 拙稿「寡頭政下フィレンツェの一政治家の生涯とその「家」ーボナッコロソ・ピッティの『年代記』について」,『大阪外国語大学学報』第53号所収論文参照。
 - 9) サッソ著須藤祐孝, 油木兵衛訳,『若きマキアヴェッリの政治思想』,東京 1983に含まれた報告書に関する緻密な一連の分析を参照。
 - 10) 誇り高き小領主 Ricasoli 家より, リソルジメント期に活躍し Cavour の後をついで首相となった(1861) Bettino (1809-80) が生まれた。
 - 11) Gondi 家は比較的新興のようだが, Medici 大公による君主政下では11人の *senatore* (元老院議員) を出し, 第6位(ただし5家あり)に達している。
 - 12) Negri, op. cit., pp. 172, 230, 528.
 - 13) 註 Cap. I の註3) に記された清水氏の著作で, この家の周辺は懇切に解説されており, わが国で特に正確に知られた一族の一つと見なせよう。
 - 14) 高階秀爾『ルネサンス夜話』東京 1979その他の研究書をはじめ, 辻邦生の『春の戦冠』, 中田耕治の『メディチ家の人々』,『メディチ家の滅亡』等々によっても, 余りにも名高い一族である。
 - 15) Negri, op. cit., pp. 87, 89, 100, 179, 180, 351, 456, 456.
 - 16) たとえば Antonelli e Bianchini, *Dal clericus al poeta, Letteratura Italiana II, Produzione e consumo*, Torino 1983 pp. 171-227 の調査では, 実は聖職者の占める比率は大して高くはなく, 13世紀のイタリア全体で12.44%となっている。この事実は軽視しえない。こうした, 特に北イタリアに顕著な世俗的傾向に対して, フィレンツェはむしろ, 当初はグエルフ党の根拠地として, 比較的教会に協調的だったのではないかと予想される。モンタペルティの敗戦にはこうした精神的雰囲気への衝撃を与えて変質させた可能性が感じられる。